

# 第6講座 古文

1 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔古文〕

冬も来ぬれば、けさよりなるるうづみ火のもと、やうやう立ちはなれがたし。露つゆと霜しもとおきかはし、もみぢいろこく、木々のこずゑ\*1あさぢ、浅茅あさぢが原も、冬がれのけしきとなり、おもがはりするも、秋あきにことなるながめなり。神無月かんなづきの時雨しぐれもすぎて、日あたたかなれば、すこし春ある心地こちす。うべ②此この月づきを小春こはるとぞ③いへる。

（貝原益軒『益軒十訓』）

\*1 浅茅が原あさぢが原はらはたけの低いちがや（草の名）の生えている野原。

〔現代語訳〕

冬も近づいて、今朝から火を入れた火鉢ひばちのそばも、だんだんと離れはなにくくなる。露と霜とおきかわり、もみぢの色が濃こくなって、木々のこずえや、浅茅が原も、冬枯れの景色となり、様子が変わっていくのも、秋とは違ったながめである。十月の時雨のころも過ぎてしまうと、日ざしも暖かいので、少し春めいた感じがする。この月を小春と呼ぶのもつともである。

問一 〰〰〰線 a 「おきかはし」、b 「いへる」を現代かなづかいに直して

書きなさい。

a

b

問二 〰〰〰線① 「秋にことなるながめなり」とありますが、冬の「なが

め」として適当ではないものを次のうちから一つ選び、記号で答え

なさい。

ア もみぢの色が濃くなること

イ 霜がおりること

ウ 冬枯れの景色になること

エ 露がつくこと

問三 〰〰〰線② 「此の月」とは何月ですか。

問四 〰〰〰線③ 「小春」とありますが、筆者はどんな理由から「小春」という名がもつともだと思ったのですか。

問五 この文章で描かれている時期として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 初春

イ 仲秋

ウ 初冬

エ 晩冬

2 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔古文〕

ある犬、肉にくをくはえて川を渡わたる。まん中のほどにて、その影水かげに映り

て、大きに見えければ、「わがくはふるところの肉より大きな」と心得て、これを捨ててかれを取らんとす。かかるゆゑに、二つながらこれを失ふ。そのごとく、重欲心の輩は、他の財をうらやみ、事にふれて貪るほどに、たちまち天罰をかうむる。わが持つところの財をも失ふことありけり。

(『伊曾保物語』)

〔現代語訳〕

ある犬が、肉をくわえて川を渡る。まん中あたりの所で、その影が(川の)水に映って、(肉が)大きく見えたので、「私がくわえている肉より大きい」と思つて、これを捨てて(影になつて映っている)肉を取ろうとした。このために、二つとも失つた。そのように、欲の深い者どもは、他の人の財産をうらやましく思い、何かの機会につけて欲ばるので、たちまち天罰をこうむる。自分の持っている財産をも失うことがあるものだ。

問一

線①「これ」の指しているものを古文中から書き抜きなさい。

問二

線②「取らんとす」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 「取らんとす」の動作主を古文中から書き抜きなさい。

(2) 「取らんとす」という行動を起こしたのは、なぜですか。

問三

この文章を事例と教訓の二つに分けるとすると、教訓を述べてい

るのはどこからですか。その初めの五字を古文中から書き抜きなさい。

問四

この文章で作者が述べようとしていることとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 他人の持つているものは、何でもよく見えるということ
- イ 二つの欲望は、同時にはかなえられないものということ
- ウ 欲ばりすぎると、かえつて思わぬ損をするものということ
- エ 油断すると、同じ失敗をくり返すものということ

品詞分類

- (1) 次の——線部の品詞名をあとから選び、記号で答えなさい。
- ① 雨がいきなり降り出した。でも、だれも傘を持っていなかった。
  - ② 「こんには。その犬、かわいいね。」と、友達が私に言った。
  - ③ にぎやかな声が隣の教室から聞こえる。
- ア 名詞      イ 副詞      ウ 連体詞      エ 接続詞  
オ 感動詞      カ 動詞      キ 形容詞      ク 形容動詞
- (2) 次の——線部の単語を助詞と助動詞に分類し、番号で答えなさい。
- この本は、とてもおもしろいらしい。僕も早く読みたいなあ。
- 助詞 (      )      助動詞 (      )

練習問題

1 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔古文〕

こぞの夏、竹植る日のころ、うき節茂きうき世に生れたる娘、おろかにしてもものにさとかれとて、名をさととよぶ。ことし誕生日祝ふころほひより、てうちてうちあはは、おつむてん、かぶりかぶりふりながら、おなじ子どもの風車といふものをもてるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみにとらせけるを、やがてむしやむしやしやぶつて捨て、露程の執念なく、直に外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつつ、それもただちに倦て、障子のうす紙をめりめりむしるに、「よくしたよくした。」とほむれば、誠と思ひ、きやらきやらと笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一点の塵もなく、名月のきらきらしく清く見ゆれば、迹なき俳優見るやうに、なかなか心の皺を伸ばしぬ。

又、人の来りて、「わんわんはどこに。」といへば、犬に指し、「かあかあは。」と問へば、烏にゆびさすさま、口もとより爪先迄、愛嬌こぼれてあいらしく、いはば春の初草に胡蝶の戯るるよりもやさしくなん覚え侍る。

(小林一茶『おらが春』)

〔現代語訳〕

去年の夏、竹を植えるのによいという日(陰暦の五月十三日)の頃、つらいことの多いこの世に生まれた娘に、(生まれつきは)愚かであつても利口に育つてほしいと思つて、名をさととつけた。今年の誕生日を祝う頃から、「ちようちちようち、あわわ」「おつむてん」という遊びも覚え、「かぶりかぶり」と頭を振りながら、同じ年頃の子供が風車というものを持っているのを見ると、しきりにほしがつてむずかるので、すぐに与えようと、間もなくむしやむしやとしゃぶつて捨て、少しの執着

5

10

心もなく、すぐにほかの物に心移りして、そこらにある茶碗を打ちこわしているかと思うと、それもすぐに飽きてしまい、障子の薄紙をめりめりとむしるので、「よくやった、よくやった」とほめてやると、本当にほめられたと思い、「きやつきやつ」と笑つて、一生懸命にむしつてしまった。心の中には少しの塵もなく、まるで名月がきらきらと光り輝くように清らかに見えるので、並ぶもののない名優の演技でも見ているようで、大いに心の皺を伸ばした。

また、人が来て、「わんわんはどこに。」という時、犬を指さし、「かあかあは」と問うと、烏を指さすさまは、口もとから爪先まで愛敬があふれて愛らしく、たとえていえば、春の若草に蝶々が戯れているのよりも優美に思われることである。

問一 線①「とみにとらせけるを」にあたる現代語訳を書き抜きなさい。

さい。

問二 線②「なかなか心の皺を伸ばしぬ」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

答えなさい。

(1) 「心の皺を伸ば(す)」とは、どのようなことをたとえた表現ですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 気持ちがあつたりとして晴れやかになったこと

イ 積み重なっていた誤解がとけたこと

ウ 思わず見とれて心がひきつけられたこと

エ お互いの心と心とが通じ合ったこと

